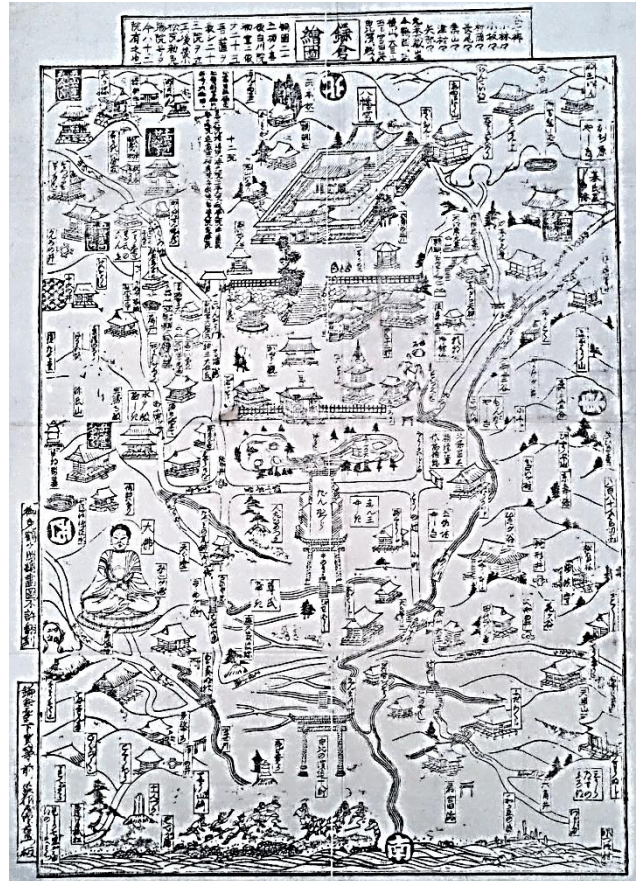


江戸時代の鎌倉周遊

中世に政治・文化の中心だった鎌倉も、江戸時代には「板東の一寒村」となりましたが、それでも鎌倉五山を始め寺社や史跡に富み、多くの人々が巡拝しました。

東海道から鎌倉へ向かう道は、「東海道分間延絵図」によると、まず保土ヶ谷宿から「金沢・浦賀道」へ行くルートがあり、これは、金沢八景を観て鎌倉に入る道筋です。他に戸塚宿、藤沢宿から向かうルートもありましたが、金沢・鎌倉・江の島をセットで周遊するのが、当時は主流でした。



『鎌倉絵図』

家根屋四郎右衛門 <請求記号：K292.4/73>
鶴岡八幡宮の許可を得た刊行物であり、原本通りに新規出版することは許さない、という意味の「御免鶴ヶ丘繪畫図 不許翻刻」という刻印が左横にある。

鎌倉を訪れる人が、必ず参拝するのが鶴岡八幡宮でした。徳川氏は源氏の系譜を引くと言われ、家康は当社に多くの杜領を寄進し、幕府は代々手厚く保護しました。また、鎌倉の地誌や案内書も多く編纂されました。

幕末には外国人の旅行者も増え、トラブルも起きました。元治元(1864)年、イギリス陸軍士官のボールドウィン少佐とバード中尉が、大仏を見学した後、鶴岡八幡宮の参道に入る所で攘夷派の二人組に殺害されています。

【参考文献】

『神奈川の東海道 下』神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年<請求記号：K68/330/2>
『横浜外国人墓地に眠る人々』斉藤多喜夫著 有隣堂 2012年 <請求記号：K26.13/17>

江戸時代の江の島詣

『吾妻鏡』に頼朝や実朝が参詣したと記される江の島は、江戸時代には、庶民の「江の島詣」が盛んになります。

『東海道分間延絵図』によると藤沢宿の大久保町橋側に江の島弁財天の鳥居があり、江の島道の入口になっていました。他に保土ヶ谷宿から金沢道、戸塚宿から鎌倉経由などで、人々は江の島に向かいました。

弁財天信仰は別当が管理し広めていましたが、島民の中には「御師^{おし}」と称してお札を配る者もおり、各地に講中を流行させます。特に江戸は多く、御

出入講中、町方講中など同業者で結成されました。『新編相模国風土記稿』に「毎年四月初巳日、龍窟より辨財天を神輿に遷し奉り、社僧・神人行装を整へ、音楽を奏し。



『東海道名所畫帖』 歌川広重（初代）画 東魁堂
1851年 <請求記号：K72/2> より「江の島」

御旅所え遷座。此節は参詣の緇素群をなせり。十月初亥日、又龍窟へ還幸」とあり、例祭期間中は多くの参詣者がいたことが窺えます。更に下之宮・上之宮・本宮で6年毎に交互に開帳もあり、大いに賑わいました。

【参考文献】

『神奈川の東海道 下』神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号：K68/330/2>
『新編相模国風土記稿 第6巻』雄山閣 1972年 <請求記号：K291/1A/6>